

7 右同

8 右同

9 『和歌文学大辞典』

10 『杵築文学』

11 熊谷武至『類題和歌集私記』「千家尊孫文献その二」

12 文政十一年第一編、安政元年第七編を出す。

13 万延元年十一月に一、二編を、慶応四年に三編を六卷を出す。

高度であるから模倣しようとしても普通の者では困難な点がある。
『類題』にも少数あるのでその一部を出す。

芦野川木末の風は長閑にて行瀬に早き花のしら波
咲にけり雪と見るまで足曳の山梨の花枝もたわなに
散はてし花のなごりを染ぬればにははぬ雲に山風ぞふく
なつ衣まだ肌寒き朝風に藤の花ちる松蔭の里

はしるしてみしは物かは涼舟さし出の磯の夏のよの月
真名井くみ帰る袂をかへすなりいつもの森の夏の夕かぜ
夏衣ひもゆふ蔭の松がねをををしくあらふ磯のしら波
和田原船路すずしく成にけり夕立雲のあとのしら波

ことの音は絶えていくよの秋かへし御垣原の松むしの声
鳴のたつ跡には水のおともなし山田の沢の秋の夕ぐれ
こころさへ老にける哉いにしへはさやはながめし秋の夕ぐれ
かりなきてみるだにかなし深草や野となる里の秋の夕暮

又やみむ花野の末にたつ鹿の角にかたぶく有明の月
三芳野の象山風にみがかれて玉松がえを照す月かな
夕日影尾花にかかる末野より鶉のこゑを送る秋風

これで全部ではないが、尊孫は強いて新古今風を守ろうとした人でもない。『自点』の序文には古今集序の一部を挙げているが、古典では古今集を模範としていたらしいことがその作品の傾向から考えられる。

『類題』の雑の部にある既出の題詞の文章、

尊朝が去年よめりし荇萱の歌に「かるかやの常也けりとおもへどもあなこととし今朝の乱は」といへる歌はすぐれし歌にて古

歌の中にも希にておのれ等がよめる歌にはかの歌のかたはらにたつべき歌なし。

この見解を見ると、尊孫の重んじたものは主観的な叙情である。この尊朝の歌には描写はなくて、荇萱の乱れた様を見ての感懐である。そこには叡知がある。知的な古今集風を重く見たと思われる彼の作品と併せ見てもこのことは辻褄が合っている。

春寒み猶かげ白くてる月を雪のふれると思ひける哉

「睦月十日ばかり」という題でこの歌があるが、この下句は景樹の影響を思わせるものである。景樹ほどの清新な作品はないが、その方の影響があったことも考えられる人である。

千家尊孫は以上で知的な歌人であることが知られるが、二つの歌集中に大よそ五千首の歌はあると思われるからその中には写実的な作品もあり、新しい面も持っているのであるが、紙数の関係で、いまは割愛することにする。

注

- 1 尊孫の年齢については諸説がある。『国学者伝記集成』の説に対して、大杜町教育委員会発行の『杵築文学』は寛政八年三月十三日生、明治六年一月一日没、七七歳とする。また、歌集『類題』にある弘化二年五〇歳だとすると明治五年没なら七七歳。安政三年六〇歳とする『自点』に従うと明治五年は七六歳である。
- 2 木版本。県立徳島図書館蔵。
- 3 木版本刈谷図書館蔵。
- 4 『国学者伝記集成』『和歌文学大辞典』
- 5 本居大平門の加納諸平が和歌山で編集出版した類題和歌集。七編まで出版。
- 6 『国学者伝記集成』

力に充ちたものである。『自点』の方には旋頭歌一四首、長歌七首があるが古代の歌に全く関心がないことはなかったのである。

この歌集のなかで、最も目立つのは知的で説明風の古今集の歌風である。先ず知的に解釈して説明する古今集風の歌を挙げる。

あし鶴の翅は雪にまがへども声は春めく物にで有ける

見る内にやがて盛になる物は降しく雪の花にぎりける

咲そめて嬉しきうへに嬉しきはつぼめる花のおほき也けり

みよしの春の盛をみわたせば口こそ花の姿なりけり

みるからにいろそふ物は山のはに夜をまつ月の紅葉なりけり

このように情景を説明して叙情風にするのは古今集の歌の特徴であり、この時代から始まった歌風である。

理由を説明したり、知的に比喻を使って人の意表をつくといった古今集風の作品を次に挙げる。

降くれどたまらぬ春のあは雪は空に残るといふべかりけれ

時過とふれるみ雪の花なれば帰り咲とぞいふべかりける

ふりにける柳の糸を新らしく春は日毎に染かへしつづ

ぬるみ行音をしるべに耳敏川岸の柳も眉ひらくなし

いと桜いとおほく植て吾宿にくる人々のつとにをらせん

山姫の雲に桜をこきまぜておるは白地の錦也けり

風冴て猶しら雪のふるさは春にしられぬ花ぞちりける

来る秋を我つげがほの桐の葉もおつるは風のたてばなりけり

秋ののにかり庵つくる旅人のしとねは秋のにしき也けり

あき寒みまだき降ける霞かとみゆるは露の氷る也けり

神無月道ゆき人のあしときは時雨の雲のおへば也けり

時間の経過からものを見る知的な面も古今集の特徴であるが、次の歌はそのような傾向の作品である。

如月やけふは雪さへつもりけり昨日は霞に驚かれしを

昨日こそ春を告しか卯花の雪にふりゆく鶯のこゑ

また、次に挙げる歌のように、古今集の歌を思わせる作品も多い。

打わたす遠かた野への春風に若菜つむ子か袖かへるみゆ

松浦濁なびく霞の絶間より唐土船にはる風ぞ吹

おもひきや思ひの外の雪の花花まつ枝に咲んものとは

梅の花雪とちるよは木末より月もこぼるる気色なりけり

玉くしげ箱根の桜咲にけり明けゆく峰にかかる色雲

このように明らかに知的で古今風の系統だと思われる歌は

春 六九 夏 二〇 秋 三八 冬 一三などがあるが、知的な

風にそれだけに止まらないで、叙景の歌のなかにもその種のもの

がある。それらは空想的に知的に構成されている。例えば、

谷の戸は花の光に先づ明てしらみおくる山かつら哉

山ざくら雪とふればいはほにも春は誠の花ぞ咲ける

くさぐさの花野をみれば此の原に朱にみどりに置る露かな

蔭深み影をやどさぬ谷水もひびきは月に移ひにけり

山高み月の下ゆく村雲の上にしぐれてちる木葉かな

人とはぬ宿には苔の深ければちる木葉さへ音せざりけり

このように知的な構成をした作品もかなりあるが、知的な技術に誇を感じているようにも見える。題詠がまだ支配していた近世歌壇では技巧がまだ重んじられていたことを示している。

知的な構成では高潮に達した新古今風は、技巧そのものが相当に

鯁玉集	順位	千船集	順位	合計
中島広足	二二三	四	二八八	四
加納諸平	一七八	一〇	一九五	六
千家尊孫	一四四	一三	二二一	五
仲田顕忠	九四	二三	五三	一八
				一〇七

このように尊孫は当時の歌壇で高い評価を与えられているが、実際の作品はどうであつたか。

三

尊孫の二つの歌集のうち、『類題』の方が歌数が多いので先ずこの方を見ることにし、『白点』の方は点を入れた歌を主にして見ることにする。

尊孫の歌にはいろいろな歌風が見られるが總体的には強い調べを持っている。そのなかでも万葉風を思わせるものが少数ある。それは極めて少ないので全部を次に掲げる。

山なみのするどき白もうらうらとみゆる春べに成にけるかな
 春かけて残れる雪か大船の真帆より白きおきの高山
 春がすみ立こそわたれ大島の鳴戸は浪の音ばかりして
 天の戸はほがらほがらに国土はかすみ果たる春の明ぼの
 玉簾ひまもる風を寒しともおもはめ春に成にけるかな
 風寒み今やちるらん片岡のあしたの原の秋萩の花
 吾兄子がきぬにすらんと植し萩みるとも人よ手ななふれそも
 いとはやも咲ぬる萩かさをしかは山の奥にもまだなかぬ間に
 見わたせば千町八千町八束穂の足穂の秋と成にける哉

この最後の歌は特に調べを強調し、感情の高揚を目的とした歌であるが、総体に写実歌ではなく、真実によって実感を誘う程類の万葉風ではなしに、高い調べによつて強い感動を起させる作品である。万葉集から古今集初期時代にいたる主観的な叙情的な歌風であるが、知的に作られた歌よりは遙かに感動がある歌である。

肌寒く秋の夕風立しより月のすむよと成にける哉

天の海月の出しほに嬉しくもよものあま雲晴にける哉

箱根路を月にこゆればこゆるぎの磯の波わけ夜舟こぐみゆ

このようにはっきりと万葉を模したものもあるが、その数も僅かである。

更る夜の月にうそぶく声すなり遠の村人うたげすらしも

あゆの風寒く吹ぬる夕暮にたちいでみれば雁わたる也

かげしげきあしべを鳴の鳴たちて月の面に飛わたるみゆ

朝日山くもりもあへず立花の小島崎はしぐれ降也

天のはらさえにさえたる月みれば冬の夜いたく更にける哉

近江なる鳥の大湖おしなべて氷れる冬に成にける哉

つの国のこやの池水つららゐて寒き夕に芦火たくみゆ

安房相模朝びらきする百船は大江の御戸にけふかいるらん

青丹よし奈良坂越て旅衣たつたの山をけふみつる哉

塩むかふうな上潟の沖つすにむれるし鶴の群てたつ見ゆ

梓弓いでみの浜に引塩を待えて子らが貝拾ふ見ゆ

三七〇〇首余の作品のなかの二三首では全く問題にはならないが、それだけでも万葉風があるということは、心のどこかには万葉風がひそんでいた表れであろうか。それにしても、これらの作品は相当

富士谷御杖 一九七

加納兄瓶 一七八

清水浜臣 一七三

白井治堅 一五〇

田中芳樹 一四九

千家尊孫 一四四

長田美年 一三八

飯田年平 一三七

熊代繁里 一三四

小野 務 一三二

長沢伴雄 一二八

この歌集では十一位である。この歌集は七編まで十四巻出版したが、第五集までの作者数は一七六〇人である。第一流の歌人の中に伍している。

また、時代的に『類題鯨玉集』に次ぐ『類題千船集』⁽¹³⁾は佐々木弘綱編で伊勢国からの出版である。この歌集では第五位である。

井上文雄 五二三

足代弘訓 三二五

佐々木弘綱 三一二

中島広足 二八六

千家尊孫 二二一

加納諸平 一九五

藤尾景秀 一七九

八田知紀 一六五

熊谷直好 一二〇

萩原広道 一一六

沖 安海 一〇四

黒沢翁満 一〇三

小林歌城 九八

横山桂子 七八

本間游清 七四

前田夏蔭 六七

また鈴木重胤が天保十四年に出版した『近世名家歌集』七巻は、長嘯子、契沖等の先輩から現代までの作品を集めている。そうした先輩たちを除いた、近世末期の人たちの数は次のようである。

大江広海 二一七

千家尊孫 一一三

村田春門 九四

中島広足 八九

香川黄中 六九

八田知紀 五六

石川依平 四七

近藤光輔 三〇

青木永章 二九

熊谷直好 二〇

ここでは第二位で高い位置である。いま、『鯨玉集』と『千船集』の二集を通じて見ると次のようになる。

父から付けられているので教子が真主と付けよと言ったが、愚なる歌集であるからあらまであらうと環の字を使ったという。

歌数は

類題真璞集 三卷

春 五六四 夏 三六七 秋 五八七 冬 三七七 恋 五三九

雑 一一六四 旋頭歌 一九 他人歌 五

総計 三六二二

自点真璞集

春 三二三 夏 二二三 秋 三二九 冬 二五〇 恋、雑 五

〇六 旋頭歌 一三 長歌 七 追加、短歌 六四 旋頭歌 一

四 長歌 七

総計 二三六二

『自点』の作品は『類題』の中の歌だけから選んだのではなく、その中になく作品も含まれている。それは、前者が嘉永二年(跋文年月)頃までの作品であるが、後者は慶応元年(序文)頃までの作品が含まれていて、前者が出版された後の作品も含まれているからである。

尊孫は国学を宣長門の千家俊信に学び、和歌は二条家流出雲匠宗⁽¹⁰⁾千家長通の教を受けたという。彼の若い頃は出雲国には白翁釣月、小豆沢常悦、芳房、千家長通、北島孝起など二条流の歌人がいたという。当時出雲大社に勤めていた神官の歌人は総て彼の門下であったろうが、そのなかでも島重老は最も優れた歌人だったようである。指導を受けたという千家長通は『類題』に「千家長通十三年の祭にし」という歌がある。歌集⁽¹¹⁾『はなのしづ枝』には西村公信、中言林、千家之正、中光章、高木年景、佐草文清、島重老、赤塚澄景、平岡雅

足、赤塚孫重、佐草美清、島重胤、中臣正蔭、千家尊孫などの大社関係の歌人が出ている。

千家の家は大国主命に従い代々出雲大社に奉仕して来た神代時代からの名家であるが、元祖は出雲国意宇郡熊野宮にいたのが、後に杵築にあった杵築宮と合併して杵築に移住し今日に伝わる出雲大社になったという。彼は天保三年十月二二日に没した父尊之の後を継いで二三日に国造となった。その時の歌が『類題』のなかにある。

天保三年十月廿三日廿四日廿五日打はへて天気よかりし折しも

大庭へ火継に参りて

日をつぎてのどけき冬の御空哉是ぞ我世の例なるべき

同月意宇郡熊野の宮に詣て

熊野川たえぬ流を類ひにて我がうみの子の末守らなん

火継式は国造の継承式である大庭は熊野宮のある処である。このようにして国造在職三八年で明治二年一月六日に子の尊澄に職を譲ったという。

名家の出であるといっても山陰の田舎にあった尊孫の歌壇的地位はどんなものであったか。近世末に盛んであった類題和歌集から窺って見よう。当時最大の類題歌集であった加納諸平編の『類題鯨玉集』の作者別歌数を列挙する。

夏目襲磨 三二八

石川依平 二七五

村田春門 二六〇

中島広足 二二三

本居大平 二〇八

などの作品があるが、一応実際に即したものと見ても、形式上はよい訳である。

三男尊朝は少年の頃から資質が優れておりまた妾腹ということもあつてか尊孫は特に愛していた。『類題』のなかに次のような詞書がある。

天保十一年六月十日斗重老と物語のついでに尊朝が去年よめりし
菫萱の歌に「かるかやの常也けりとおもへどもあなことごとし今
朝の乱はしといへる歌はすぐれし歌にて古歌の中にも希にておの
れ等がよめる歌にはかの歌のかたはらにたつべき歌なし。人に乞
れたる時物のはしにもかいつくべき菫萱の歌いかでよまばやとか
たりつつ

尊朝の歌は菫萱の状態に対する感想で批判的である。これをよしとして
しているところを見ると、尊孫は写真よりも主観的な感動をよしとし
ているのである。そしてこの三男に驚きを感じている。その三男は
前述のように二一歳で若死にした。

三郎成ける尊朝十一年正月十日斗より煩ひけるに二月なかばよ
りおこたりければ猶病の愈ん便りにも成べしとて弥生の十日斗
旅に出立せけるを卯月廿六日歸りて又の日身まかりければ

やみつつも昨日は家に歸りしを今日はかへらぬたびに出ぬる(『類
題』雑)

旅に出たというのは恐らく近くの温泉などに療養に出たのであろう
が、早い死で尊孫の嘆きの程も思われる。これらの歌については後
に述べることにする。これらが尊孫周囲の大体の人々である。国学
者として出雲大社中心の杵築に影響を与えたと思われる千家俊信は

天保二年が六八歳であるからこの年三九歳の尊孫とは約三〇歳の差
があり、その影響はかなり強かったと見るべきであろう。

尊孫は香川景樹、加納諸平、石川依平らと親交があつたというが、
『国学者伝記集成』が引く『棚草紙』は景樹が

大かたは春のよそげに思ひなすえぞが千鳥やまづかすむらん
心あるあまがねざめやいかならむ千鳥なく夜の松がうらしま
こと他に竹の歌を併せて三首を称賛したと伝えている。いずれも主
観的想像的な作品である。又『類題』には「石川依平がこへる月の
歌に」という作品がある。

二

尊孫の歌集は二つある。初めにできたのが『類題真璞集』で、嗣
子尊澄が嘉永六年五月に跋文を書き、この三巻は父の若かった時が
ら嘉永の初め頃までの歌を中臣正蔭に書かせたものだという。「鶴
山社中藏板書目」というのがあつてその後、安政二年乙卯五月発行
とあるからこの年の発行である。販売所は若山、姫路、名古屋、江
戸、京都、大阪と出雲大社は和泉屋助右衛門である。

一方『自點真璞集』は天日隅宮御杖代兼国造尊孫の自序で、年来
詠んで来た歌の中から一応の出来と思われるものを社中の男たちに
選り出させ、その中でも自らもよいと思われるものを、古今集の序
に、「歌とのみおもひてそのさましらぬなるべし」と言っているこ
とにひかれて、歌の本質も知らず、どこといってよいという歌では
ないが、まああまの歌に自点を付けたと書いているのが慶応元年九
月である。そして、最後に真璞の名の由来、それは自らの名が真と

る。また、尊孫自身は天保十三年に『類題八雲集』を出版した。

尊孫の身内では宮祖父俊勝、祖母与位子、父の国造尊元、弟が尊晴、長男尊澄、三男尊朝がある。父は天保三年十月十二日没しているが母は出て来ない。

彼の妻は六十賀に出て来る理子で七十賀の歌もある。この妻は尊孫が書いているように大納言基理女で園代である。ところがもう一人妻と見られるのが登祢子という女性である。『類題貞璞集』雑に、

「天保四年登祢子が重くわづらひける頃」とあり、

かくて六月八日身まかりければ

夢路をや今はたのまむ現にてみるは景こそ限りけり

とあり、以下

いかさまのことをなさばか束の間も妹が事をば忘れてあらん

忘れじと昔契りしかひやこれ忘れんとすれど忘れぬ哉

玉くしげ明るだにこそうかりしかおもへば二たびあはぬ別を

今よりはいかにかにうき世をなぐさめんあひ思ふ人はなくなりけり

程ふればさすが人めの恥られて恋そめし世にかへる恋哉

うきふしもあまた経しかど片糸のかかる悲しき筋はなかりき

こうした歌が並んでいるところから見ると、その悲しみの深さは、

深く馴染んだ女性でなければならぬ。天保四年というと、尊孫も

まだ四一歳であるから若い。従つてこの女性の年齢も想像される

訳である。長男の尊澄⁽⁷⁾は正妻の理子の子であり理子は七〇歳以上生

きているのだから登祢子は後妻ではない。三男の尊朝は天保十一年

没したが二一歳の若死⁽⁸⁾にて生母は渡辺代登祢子であった。これから見

ると登祢子は尊孫が妻理子と結婚した後でできた妾である。尊朝は

文政三年生まれであるからこの年尊孫は二七歳である。この女性とは恋をしたであろうか。恋の歌が多くあるが、大部分は題詠であるのがこの時代でも慣しである。そのなかにも真実らしい歌があるかどうか。『自点真璞集』恋部冒頭の歌で自らも点を入れている。

一目見てうるはしと思ふわが心やがても恋と成にける哉

うちつけにいはむはやさしさりながらおもひそめつと誰にかたら

ん

いもが身もいつかからむ面影は恋そむるよりはなれざりけり

これなどは実感が出ているようであり、また『類題貞璞集』の恋の

部にあつて、題はただ「恋」とある作品の中の

君を思ふおもひばかりぞ思ふをもおもはざるをも思ふ我かは

こそこそと我はおもへど我を君いとはましかばいかにしてまし

ひたつちに葉ときしける伏いほも君としすまば我いとはまじ

こうした歌にも真実のひびきがあるように思われる。また、二つの

歌集共にある。

正月ばかり女につかはしける

春立て雪も氷も残らぬをまだ打とけぬ物や何なり

は実際に即した歌であろうか。また『類題』の方にある、

文やりたるかへりごとに物かかぬ紙をおこせければ

おもひ余水にひたしてみたれども文学の形は俤もなし

いとつれなかりける人に

恋しさもありつもればもののけとなる習ひあり君はしらずや

夏のあした女の許よりかへるさ河辺をすぐとて

川風の涼しき今朝ぞおもひいづる千鳥鳴つつ霜さえし夜を

折しも越前国氣比宮司石塚安芸守資元がうたに何事も人におくる
る吾身哉さてや命も久しかるべきとよめりしを思ひて

尊朝妻虎子はいと若かりければ去年の夏親のもとに歸しけるを今
年卯月の廿日斗より御魂拝まんとて来りけるをみて

なき人の着ならし衣今みれば涙のつまと成にける哉

同じ頃松江士森為泰が島重老が方へおこせる消息をみて

鷹司殿下の姫君御迎かへに江戸より左近将監忠房石川上洛の折よ
みて遣しける

西尾家士鷺田為精がほぎ歌こへるに

横山鬼巖が年若くして絵の道に秀たるを

飯石郡吉田なる田辺豊房が四十賀に

米子人麻島重正が父の六十賀に

同国（安芸）後藤夷臣が父の九十賀

（以上類題）

安政二年五月七日千家清主俊信廿五年の祭に

安政五年千家基主俊栄身まかりけるをいたみて

尊澄が新曹子にわたまししける折寄竹祝

元治二年正月石見国大田乃郷の公民恒松与吉良忠利六十歳をこえ
ければ長子格之助忠照に家をゆづり名をゆづりて無事老と改ける
を祝て

中村守午がわたましせる悦に

妻理子が六十賀に寄松祝 理子ハ園大納言基理女

弟尊晴が六十賀に寄松祝

中山琴主が六十賀に

嘉永七年柳原右中弁光愛朝臣の祖母の七十賀に秋祝
倉敷清洲の母の七十賀に

柳原寿幸に愚歌百首かきてつかはすとて……

安政二年朝廷より勅の御祈九月の度の御玉串さ、げに十月斗中言
林を都へつかはす折千家好通が同じく行に（江戸）

同じ折高木年景がともなひ行に

佐草美清が子父清をつれて同じ所へ行に

安政二年松江士森為泰が夷国船防禦の備に武蔵国本牧へ行に

文久三年十一月年頭使に赤塚澄景が江戸へ行に

別火千秋財吉満人々をつどへて多加良といふことをよませける日
つかはしける

これらの人々のうちで歌人として注意すべき人は、因幡国の飯田
年平、同国人小谷古陰、越前敦賀氣比神宮宮司石塚資元などである。
また岩見国にいた岡部東平は学者でもあった。出雲風土記の研究の
ために出雲国杵築に来て千家俊信の家に寄寓していた。飯田年平は
秀雄の子で和歌山に出て加納諸平門に入り類題和歌集『鰻玉集』の
編集をし、全国を回って歌を集めてもいた。恐らく出雲に来たのも
それではなかったか。

⁽⁶⁾ 千家俊信は千家の一族で京都に上り、浪花に寓居してもいたが宣長
門に入って山陰道古学の祖と言われている。明和元年生まれ、天
保二年六八歳で没した。出雲の学統は俊信を承けているであろう。
江戸に使している人らはみな大杜奉仕の神官である。この人らを中
心とし、尊孫を主宰者として杵築歌壇が作られ安政四年（一八五七）
に出版された歌集『はなのしづ枝』には杵築歌人が五十人入っている

千家尊孫論

辻 森 秀 英

一

千家尊孫⁽¹⁾は出雲大社の神官で七八代天日隅宮御杖代兼国造であった。『国学者伝記集成』によると、寛政五年生まれ明治五年没八〇歳である。歌集は『類題真璞集』⁽²⁾全三冊と『自點真璞集』⁽³⁾の二つがある。この歌集の中には次の人々の名が出ている。

島重老が江戸へ行別に

千家之正が同じ別に

赤塚孫重が同じ別に

島重胤が同じ別に

平岡雅足が同じ別に

佐草文清が同じ別に

中光章が同じ別に

中臣正蔭が都へのぼる別に

長谷切村が卯月ばかり都へのぼるに

画工大口秀芳が都にかへるに

市川末松が江戸に有ける頃消息のはしに

周防国岩政信比古が帰る時又来りねと契りて

因幡国人飯田年平来りける時遣しける

同国人小谷古陰が来りて

天日隅宮の造営願ひに平岡雅足を江戸へ遣しける時

同じ時北島美濃孝通が伴ひ行に遣しける

岡部東平が石見国に住ける時歌ふみをみせけるをかへすとて

天保三年伊勢大神へ代参に田辺元修出たたせける日、

孫丸俊栄が読せける同じところを

広瀬信銀二十ばかりの頃いとうとく成るに

同じ人のよませけるに同じ心を

岩崎為平が家の名園をほぎてよといふに

天保三年三月八日瀧姫廿五年の祭に

大祖父国造俊勝宿称の五十年の御祭に

文化十年十月十日祖母与位子の失給ひし時

千家長通十三年の祭に

文政十三年長月の始広瀬和親が身まかりけるに

天保三年十月廿二日父の身まかり給ひし時

天保四年登祢子が重くわづらひける頃

三郎成ける尊朝天保十一年正月十日斗より煩ひけるに……